

JOYAMA NEWS

University of Teacher Education Fukuoka
Campus Magazine

特別号

Joyama 通信
福岡教育大学広報誌

統合・移転当時の福岡教育大学赤間キャンパスの航空写真(1966年)

福岡教育大学創基150年を迎えて

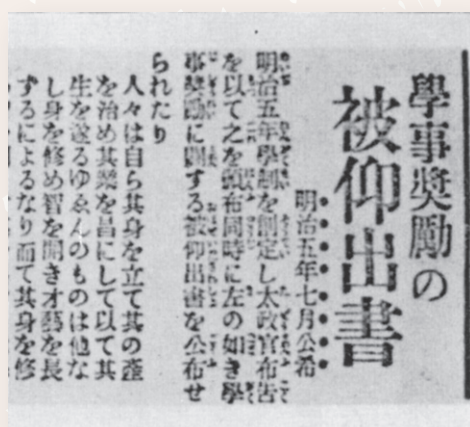
現在の福岡教育大学赤間キャンパスの航空写真



国立大学法人
福岡教育大学

福岡教育大学創基150周年を迎えて

福岡教育大学のルーツは、明治6年に開設された教員養成機関である「学科取調所」に遡ります。この学科取調所に始まり、時代の変遷とともに進化を続けながら、令和5年に創基150周年を迎えます。



このような歴史と伝統をもつ本学は、我が国の教育界を支える多くの優秀な人材を輩出してきました。そして、これからも九州・沖縄地方における教員養成の拠点大学として、生涯にわたり学び続ける有為な教育者を養成することを基本理念とし、これまで本学の発展を支えてこられた多くの方の思いをつないでいきます。

目次	02 福岡教育大学創基150周年を迎えて
	03 学長メッセージ
	04 福岡教育大学創基150周年記念インタビュー
	06 福岡教育大学創基150周年記念OB対談
	08 福岡教育大学150年の歴史
	10 写真ギャラリー

M E S S A G E



学長 飯田 慎司

福岡教育大学の起源は、明治6年(1873年)、福岡大名町の旧・修猷館内に設置された学科取調所に由来します。爾来長い年月を経て、今年(2023年)で150年になることから、このたび、本学広報誌の特別号を発行するとともにホームページにも掲載して、教員養成に関する本学の足跡を辿りながら、創基150周年をお祝いしたいと思います。

学科取調所は、教員伝習所等を経て、明治9年(1876年)に福岡師範学校と改称され、その後も、福岡県尋常師範学校や福岡県師範学校と改称されました。また、明治22年(1889年)には大名町から荒戸町に移転しました。さらに、明治36年(1903年)に女子部が独立して福岡県女子師範学校が開校、そして明治41年(1908年)福岡県小倉師範学校の創設に伴い、福岡県福岡師範学校と改称され、昭和18年(1943年)には福岡県女子師範学校と統合し福岡第一師範学校となりました。福岡県小倉師範学校が同年に改称した福岡第二師範学校、そして県南部にあった福岡青年師範学校とともに、この3校が包括され、昭和24年(1949年)の新制・福岡学芸大学の発足となったのでした。

福岡教育大学への改称や本校及び各分校の赤間統合移転を含め、新制大学発足後の70余年については、令和元年(2019年)の創立70周年記念行事や平成28年(2016年)の統合移転50周年記念行事等で詳しく取り上げられておりますので、ここでは、明治6年(1873年)から昭和24年(1949年)までの足跡を中心にご紹介させていただいた次第です。

各師範学校や福岡学芸大学(本部、本校、第二師範男子部に小倉分校、女子部に田川分校、第一師範男子部に福岡分校、女子部に久留米分校、青年師範に分教場を設置)、そして福岡教育大学の卒業生や教職員の皆様の母校への思いを感じながら学長職を務めております。

各時代を通じて本学が一貫して取り組んできたのが教員養成であり、現在でも、福岡県を中心に九州・沖縄地方における教員養成の拠点大学として、生涯にわたり学び続ける有為な教育者を養成するという基本理念を掲げて実績を上げており、令和4年3月の卒業生のデータでは正規教員就職者数で全国第1位、教員就職率でもトップクラスを維持しています。

これからも、学部教育はもちろん、教職大学院の充実等を含めて、教員養成の高度化に取り組んで参りますので、どうぞこれまでと変わらぬご支援ご協力をお願い致します。

福岡教育大学創基150周年記念インタビュー

学科取調所から福岡教育大学まで たったひとつの “変わらないこと”

福岡教育大学の「城山会」を知っていますか。

福教大の卒業生はもちろん、前身の福岡学芸大学、さかのぼれば
師範学校時代にもつながる同窓会組織です。

学科取調所の創設から今日まで〈教育者を育む学校〉として一途に歩み、
輩出した卒業生それぞれの経験や深い知恵はこの城山会にも蓄積されています。
「苦しいときは先輩を頼ってください。それが同窓会の意義です。」

——城山会の現会長・太田勝視先生にお話を伺いました。

福岡教育大学同窓会
城山会 会長 **太田 勝視**先生

昭和38年福岡学芸大学入学。田川分校、福岡本校へ通い3年次の秋に
キャンパスが赤間へ移転。昭和42年大学名を改称した福岡教育大学の一
期生として卒業。以後38年間にわたって公立小学校ひと筋に教員生活を
送る。現・福岡教育大学同窓会城山会の本部長。若手・新任教員、学生
による情報交換会の立ち上げなど新たな同窓会活動に取り組まれている。

田川分校、福岡本校、赤間の3キャンパスへ通学

——太田先生は福岡学芸大学が福岡教育大学に改称する移行期に大学
に在籍されていたそうですが、当時のことを伺えますか？

太田先生 私が入学した昭和38(1963)年当時、福岡学芸大学は福岡・
小倉・田川・久留米の4カ所の分校に分かれていました。私は地元が田川で
専攻する理科の研究室もあったので田川分校に通いました。

当時は1～2年次は分校に通い、3年になると各分校から福岡市(南区塩
原)の本校に移る、という流れだったんです。自分もそうなと思っていたので
すが、3年次に本校へ移った半年後、同じ年の秋には赤間キャンパスへ移る
ことになりました。

——資料に「本校の赤間移転は昭和41年」と記載があるのですが、その前
年(昭40)から移動は始まっていたんですね。

太田先生 一部先行だったのかもしれませんが。私は田舎育ちで福岡に憧
れがあって「3年になったら福岡で暮らせる!」と楽しみにしていたんですが、
たった半年で赤間に移ったのでよく覚えています(笑)。4年生の先輩方も同
じ時期に本校から赤間へ移ったと記憶しています。

そして、翌年3月に先輩方が卒業されて、4月に大学名が福岡学芸大学から
福岡教育大学に改称されました。ですから私たちの期が福岡教育大学の
名称としては最初の卒業生になります。

——分校、本校、赤間の3カ所を経験された世代は稀ですね。特に印象に
残っているキャンパスはありますか？

太田先生 それぞれ思い出深いですが、やはり1～2年次の分校時代が印
象に濃いです。いわゆる教養課程ですが、分校なので学生の数も少なく家族
的な雰囲気でした。なかでも所属していた小学校の理科の研究室は同級
生が女子4人、男子2人と小規模で。そこに生物、物理、地学…とそれぞれの
先生方がついてご指導くださるので関係性が非常に近く、何より実習がユ
ニークでした。

——どんな実習だったのですか？

太田先生 例えば生物の先生は私たちを連れて英彦山(ひこさん)に登る
んです。自生している植物を実際に見て、葉っぱなどを採取しながら特徴を
覚えるわけですね。その時々でルートを変えて皆で何度も登りました。試験に
なると先生がパッと葉っぱを出されて、それが何の植物でどんな特徴かを当
てなければいけないんです。

——面白そう!フィールドワークが活発だったんですね。

太田先生 物理の先生がウソ発見器を作ったこともありました。いわば手か
ら出る汗を感知する装置なんです。僕らが試すと反応するんですよ、嘘を言
うと分かるんです。そういうものを先生は簡単に作られていましたね。地学の
先生とは福井県の白山(はくさん)まで行きました。石を採取するんですが、
砕いていくと中から化石が出てくるんです。普段は座学が中心でしたが、時
にこういう指導を交えてくださって楽しみながら学んだから鮮明に覚えてい
るんでしょうね。

——分校時代を“家族的な雰囲気”とおっしゃる意味がよく分かりました。当時、教育実習はどのように行われていたのでしょうか？

太田先生 4年間で2度行ったと思います。最初の実習は附属小学校に行くのですが、福岡や小倉と違って田川には附属小学校がないので代用附属というかたちで市立小学校にお世話になりました。2回目は公立の小学校・中学校ですが、私はどちらも母校ではなく受け入れ先を自分で探してお願いしました。

——教育実習で印象に残っていることはありますか？

太田先生 1回目の実習の時、実習生の誰か1人が全体研究授業をするのですが、断りきれず私が担当することになり非常に苦労したのを覚えています。先生にもご指導いただいて自分なりに懸命に取り組んだのですが、いざ協議会で発表すると厳しい指摘を山ほど受けました。実力不足だったのでしょう、ミスも多く涙も流しました。

でも、苦労したことほど時間が経つと思ひ出になるものですね。この時に親身になってご指導いただいた先生とも同窓会の会長になって再会できました。かつては指導教員と学生の関係だった私たちが、教員同士の先輩と後輩という関係になって。懐かしくお話ができるのも、あの時の苦労があったおかげだと思いました。

電気のない離島で複式学級を担当した新人時代

——今のお話にあった同窓会ですが、太田先生が会長を務める「城山会」は「福岡教育大学」の同窓会ですよね？

太田先生 名前で区切るとそうですが、実際のところ同窓会は福岡教育大学、福岡学芸大学、さらに言うなら師範学校も全てつながっているんです。創基150周年といわれるように、明治6年(1873)に学科取調所と呼ばれる教員養成機関が創設されて今日の福岡教育大学に至るまで様々なことが変わりましたが、ただひとつ変わらないのは常に「教育者を育てる学校であった」ということです。ですから私も同窓会を通してたくさんの教員の先輩方に出会うことができました。

——同窓会は世代を超えて先輩・後輩をつなぐ交流の場、しかもOBの多くが同じ教職というのは教育大学ならではの強みですね。

太田先生 昔は職場の先輩を頼りやすかったんです。教えてもらったり助けてもらいながら気軽に関係を築きましたが、今はいろいろ厳しい部分もあると聞きます。とはいえ、悩みを打ち明けられる存在は必要でしょうし、それが同じ教員ならいっそう心強いのではないのでしょうか。城山会が拠りどころになって、つながりを育てる役割ができないかと考えています。若い方々は組織に入るのに抵抗があると思いますが、「採用されて1年足らずで教員を辞めた。」と耳にするたび心苦しくなるんです。親身になって話を聞いてくれる教員仲間がいたら、ひょっとしたら解決できたこともあったかもしれないと。

——太田先生ご自身も、新任教員の頃に今の時代では考えられないようなご苦労を経験されたとか？

太田先生 教員になって初めての赴任先が離島だったんです。私が就職した時代は炭鉱の閉山が相次いでいて、子どもが減った筑豊地方の教員が余っていました。その先生方が人口の多い福岡市に広域配転されて、押し出されるように新人の枠が激減して。数年間、関西や関東に行くケースも多く、私も福岡市に合格したものの全国どこに赴任するか全く分からない状況でした。そんな中で打診されたのが、住所こそ福岡市ですが本島から約40kmの沖合にある小呂島(おろのしま)でした。行くか行かないかは選んでいいのですが「どこでも行きます!」と即決して。ですが、その時の私は何もイメージできていなかったんです。姪浜(福岡市西区)の港から小さな4トン漁船で約4時間。頭上から落ちてくるような高波の中で甲板にしがみついて、やっとの思いで到着した島には電気も十分な水もなく。本当に驚きの連続でした(笑)。

——昭和40年代に電気が通っていなかったんですか!？

太田先生 自家発電だけでした。だから電気が使えるのは夜の3時間くらいで、あとはランプです。島には井戸がひとつしかなかったのも水も貴重でした。男性教員は校内に部屋を割り振られて、夕食は用務員室に集まって皆で食べて。生活の全てが学校の中にありました。

——子どもたちや授業はどんな様子だったのですか？

太田先生 複式学級で私は3・4年生を担当しました。児童は2学年あわせて7人。当時はまだ複式教科書がなく、2学年分の教科書をまとめて渡されましたが、一般的なクラス担任もしたことがない新人が教えられるわけがないですね。でも当時はそんなこと考えもせず、「この7人にどう理解してもらうか」と必死に知恵を絞るわけでした。はじめは3年生を前の黒板、4年生は後ろの黒板を使って別々に教えていましたが、それでは教科書が到底終わらない。最終的には先生方のアドバイスも受けながら、3・4年生の理科を2年間で一緒に学べるカリキュラムを自分で作りました。

友人に会えない、出掛けるお店もない生活はきつかったですが、あの時代の経験が教員としての原点になったように思います。「ひとりも落としたりいけない」ことを胸に刻んだのもあの時代でした。

——離島の次はどちらに赴任されたのですか？

太田先生 西新小学校(福岡市早良区)でした。今度は一転して街中の学校で1学年が4〜5学級、1クラス40人の規模でした。島とは何もかもが違って、また新人のような気持ちで取り組んだのを覚えています。教え方はまだ下手でしたが子どもたちと一緒に頑張って勉強して、授業が終われば運動場でドッジボールして。クラス全員と交換日記もしました。提出の強制はせずに、一人ひとりと向き合って子どもの夢に近づいて、私の想いも語って。「ああ、やっぱり先生という仕事はいいなあ」と思う瞬間を何度も経験させてもらいました。当時担任したクラスは今も毎年、同窓会を開いてくれるんですよ。11歳、12歳だった子どもたちも年齢を重ねて見た目がもう私と変わらない、どちらが先生か分からないみたいになって(笑)。これが教員冥利です。

新人・若手教員、学生をつなぐ若手だけの情報交換会

——学びも遊びも共にして「子どもと一緒に成長し続ける先生」を目指す学生さんは今も多いと思います。

太田先生 時代も変わって今の先生や学生さんは、私たちの時代とはまた違った大変さも多いと思います。難しい時代にあっても挑戦する気持ちを大切にしてほしいですし、それから同級生でも先輩でもいい、自分が尊敬できる人と出会ってほしいと願っています。

——福教大生には城山会もありますものね。大学の同窓会というと「大先輩が主役の会合」というイメージもありましたが、太田先生が会長に就任されて若手を対象にした取り組みも始まっていますよね？

太田先生 その年に採用された新任教員と、教員になって1〜2年くらいの若手教員の情報交換会を数年前に立ち上げました。大学に集まってお互いの苦労話や相談事を共有する会ですが、今後は現役の福教大生もたくさん参加していただき「学生・新規採用者・若手教員の情報交換会」のかたちで年1回実施する予定です。悩みや現場の情報、学生が採用試験の相談をしてもいい、運営しながら方向性もかたまっていくでしょう。

福岡県内、他県の各地域には28の同窓会支会、6の支部があり、こちらも様々な研修会を行っています。参加は単発でも構いません。いろいろな方と知り合い、つながる場として城山会を使っていきたいです。そして、苦しいこと、困ったことがあるときは先輩を頼ってくださいとお伝えしたいです。それが「教育者を育てる学校」で受け継がれてきた同窓会の存在意義だと私は思っています。

——太田先生、貴重なお話をありがとうございました！

OBが語る 「私たちのキャンパスライフ」

福岡教育大学OB × 福岡学芸大学OB

福岡教育大学は、福岡第一師範学校・福岡第二師範学校・福岡青年師範学校を前身として、昭和24年(1949)に国立学校設置法のもと「福岡学芸大学」を設置。1本校(福岡市塩原)4分校(福岡市西公園・小倉市・田川市・久留米市)に校舎を分散していましたが、昭和41年(1966)に赤間(宗像市)へ移転・統合、現在の「福岡教育大学」が誕生しました。

今回は創基150周年を記念して、福岡学芸大学で学ばれた松永登喜夫先生、そして移転・統合された直後の福岡教育大学へ通学された谷友雄先生に学生時代のお話を伺いました。福教大の大先輩たちはどのようなキャンパスライフを送っていたのでしょうか。

4分校、赤間統合、大学創成期の学生たち

——お二人は大学時代からご面識があったのですか？

谷先生 いえいえ、私の方が10年以上の後輩です。松永先生とは教員になって赴任先の福岡教育大学附属小学校で知り合いました。

松永先生 私は大学入学が昭和28年(1953)ですから。福岡教育大学がまだ前身の福岡学芸大学だった時代です。

——福岡学芸大学は校舎が福岡分校・小倉分校・田川分校・久留米分校の4カ所に分かれていたとか。松永先生はどちらの分校に通われていたのですか？

松永先生 入学して2年間は福岡分校でした。現在の附属福岡中学校がある西公園(福岡市中央区)の辺りですね。その後、3年次と4年次は大橋校舎(福岡市南区塩原)へ通いました。当時は「本校」と呼ばれていましたね。

——学生同士は4分校の間で交流や行き来はあったのでしょうか？

松永先生 どうでしょうか。私は部活で野球をしていたので他の分校と一緒に何度か練習したような覚えもありますが、その程度だった気がします。正直な話、私はここで代表してお話できるような立派な学生ではなかったんですよ。世の中はまだ戦後の混乱にありまして、何より私自身が若くて考えが混乱していて、「教員になろう」「日本の教育をより良く」という志もなく、「教員くらいしか道がない」「教員にでもなるか」という考えて進路を選びましたから。

谷友雄先生

昭和42年4月福岡教育大学入学、昭和46年3月卒業。小学校理科専修。同年4月福岡市立宮竹小学校へ採用。松永先生が副校長を務めていた頃に福岡教育大学附属福岡小学校へ赴任。文部省指定の特例校として低学年の生活科カリキュラムを研究。「理科は絶対に負けない」という強い思いがありますから先生方ともよく議論しました」

——そうなんですか!? 令和の学生には贅沢な選択に聞こえそうです。

松永先生 給与体系も今とは全く違いましたからね。私が就職した昭和32年(1957)の初任給は9700円、そういう時代です。教育の夢を持って先生を志した方ももちろんいらっしゃると思いますが、生きていくために選べる選択肢の中から仕事を見つけるような時代でした。

——今とは環境が全然違うんですね。大学ではどんな講義が印象に残っていますか？

松永先生 文学が好きだったので大学の図書館で借りて本はよく読みましたが、講義は…。「聞く意思がないなら出ていきなさい」と叱られて、そのまま教室を出て桜の咲く西公園で夏目漱石を読みふけたこともありました。

——小説の主人公みたいですわ(笑)

松永先生 すごく生意気でしょう？ 当時の福岡学芸大学には偉い先生もたくさんいらしたんですよ。後に都築学園グループを創られた都築頼助(つづきよりすけ)先生だったり、大濠公園の付近に福岡簡易保険事務センター(旧福岡地方簡易保険局)がありますが戦後は進駐軍に使われていて、そこで通訳をしていた方が英語を教えに来られていたり。恵まれた環境にいなから「必要な知識は教科書を読めば分かる」なんて思い込んで教えを請おうとしない、無知で恥ずかしい学生でした。

しかし、先生方は学生をよく見ておられました。ある時、教材研究の先生に呼びつけられて「君は講義に出席していないのに、なぜ出席の返事をするのか」と叱られたんです。最初は何を言われているのか分からなかったんですが、どうやら野球部の仲間が気を利かせて出席の返事をしてくれていたようです。

——優良学生であったのではと想像していましたが、先生も私たちと同じように葛藤したり、迷ったりしながら、大学生活の中で成長されていったんですね。

今度は谷先生の学生時代のお話も教えてください。

谷先生 昭和42年(1967)の入学です。福岡学芸大学が福岡教育大学へ改称されて、4分校が赤間へ移転を開始したのが昭和41年(1966)ですから、その翌年ですね。

——この敷地にキャンパスができたばかりの時期ということですね。どんな雰囲気でしたか？

谷先生 最初の印象は田舎だなあと思いました。周りに何もなくて。赤間の駅からバスに乗り換えて通学していましたが、バスを降りると今度は坂道が続くんです。今みたいなアスファルトではなく、ただの砂利道で。だから、雨が降ると坂の上から赤土みたいな泥がどんどん流れてきてね。雨の日は家から長靴を履いて大学に向かいましたよ。

初めて教壇に立った教育実習の思い出

——現在の福教大では現場体験として1年次から教育実習が行われていますが、当時の教育実習はどんな様子だったのですか？

松永先生 私は附属小学校で4週間、教育実習をさせてもらいました。4年生のクラスでしたね。

谷先生 私も同じです。

松永先生 行けば何とかなるだろうという気持ちでしたが、どうにもならなかったのをよく覚えています。一緒によく遊んだけれど、授業になると子どもたちが全然いうことを聞かなくて。何の信念もなく、教科書をなぞるような授業をしたからでしょうね。ただ、この教育実習くらいから教員への自覚が少しずつ芽生え始めた気がします。

——当時は学習ボランティアなどもありませんし、子どもたちに「先生」と呼ばれるのも教育実習が初めてですよ？

谷先生 初めてだったと思います。ただ、僕は先生と呼ばれるよりも、あだ名で呼ばれることが多かったですね。まだ髪の毛もふさふさで眼鏡もかけていない、そんな僕の顔をじーっと見ながら子どもたちが「この人の顔、何かに似とらん？」って話しているんです。「あ、分かった！キューピーさんや！」と誰かが言い始めて、それから実習期間中ずっと「キューピー」と呼ばれました。

松永先生 子どもは上手だね、センスがいい(笑)。

谷先生 面白いことに、就職して最初に受け持ったクラスでも「先生は何かに似とう」と始まって、僕は黙っていたんですが「あ、キューピーや」と同じあだ名を付けられました。そんな教え子たちも、もう60歳。今も連絡を取ると「谷先生」と言う子もいれば「キューピー」と呼ぶ子もいて、思い出ですね。

自身を見つめ教員への足がかりを築いた4年間

——大学生活はご自身にとってどんな時代だったと思いますか？

松永先生 劣等感の克服を行った4年間だったように思います。若さゆえの迷いや葛藤、混迷の時代を生きざるを得ない歯がゆさ、反発心、様々な混濁した想いがあり、だから心理学の講義に心惹かれたのかもしれませんが。心理学で「大学入学時の心理状態を心理学的に解明せよ」というテーマをもらったことがありますが、あれをまとめたことが気持ちの整理につながったように思います。今思っても自分がどうして単位が取れたのか分からない。友人がこっそり代返してくれたように、先生方もお考えがあって気にかけてくださっていたんだと思います。扱いにくい学生だったでしょうに頭が下がる思いです。

——ご謙遜も多分に含まれていると思います。松永先生は長年、子どもたちと向き合い、学校や先生方と向き合い、教育委員会でもご尽力されました。谷先生とは福岡教育大学附属福岡小学校の副校長時代に出会われたのですよね？

松永先生 附属小学校が文部省から特例校の指定を初めて受けた頃でした。小学校1・2年生の教科から理科と社会がなくなり世の中で少し騒動になっていた時代です。「生活科」という新しい科目の考えが正しければ学力が落ちることはない、それを子どもたちを証人に立証するのが私たちの使命でした。こうした前例のない研究は教科のプロで、かつ新しいことに懸命に取り組む先生がいないと叶いません。そういう時に谷先生たちが支えてくれました。



松永先生に持参いただいた資料。福岡学芸大学前身の福岡師範学校、師範学校同窓会の資料、福岡学芸大学同窓会の資料。

谷先生 赴任直後に大きなプレッシャーで最初は驚きました。でも、「よし。ならば理科を中心とした生活科を新しく組み立てよう」と腹を括って。子どもたちと西公園に行って木の実を拾ったり、植物に触れながら学習データをたくさん取りました。子どもが自ら探究する行為を拾い上げていって体験中心のカリキュラムを精査していったんです。しかし、松永先生は赴任前から私の事をご存知の様子でしたよね？

松永先生 優秀な人材の噂は耳に入ってくるものですよ。推薦する人が信頼できる人なら本人と面識がなくても私はあまり問題にしないんです。実際、人選に間違いはなかったですし、私は長い教員人生をいつもそういう人脈に恵まれて助けられてきましたから。

——福教大OBの絆ですね。最後にお二人から、今日の福教大で学ぶ学生たちへエールをお願いします。

松永先生 偉そうなことを言える学生生活を私は送っていません。ですが、自身の子ども時代を振り返ると小学校、中学校、高校、大学時代とお世話になった先生方のお顔と名前は全て思い出せます。80代の今も懐かしく思い出せるんです。先生というのはそういう存在ではないでしょうか。勉強は大切ですし、頑張る時は頑張らなくてはいけません。しかし、悩み過ぎなくていいこともあります。まだ起こっていないことに不安になったり心配しすぎたりせず、信念をもって一つひとつに全力を尽くしていけば道は拓けます。戦後の私たちはそうやって生きてきました。皆さんも遅く頑張ってくださいと思います。

谷先生 子どもに信頼される先生を目指してほしいですね。学級が荒れる時は子どもと教師の間に対話が不足していることが多いように思います。「今から先生が話をします。15分間黙って話を聞けますか」としっかり子どもに言って聞かせる。また、子どもの話にも真摯に耳を傾ける。対話を通して子どもと信頼関係を築ける先生になっていただければ頼もしい限りですね。

——松永先生、谷先生、本日はありがとうございました！

松永登喜夫先生

昭和28年4月福岡学芸大学(福岡市分校)入学、昭和32年3月卒業。同年4月飯塚市立飯塚東小学校へ採用され、以来県内の公立・私立小学校で教員を歴任。また福岡県教育委員会で指導主事も務める。「学生時代はろくに勉強もしない、志もない、混迷した自分を持て余したような生意気な学生でした」





福岡県女子師範学校授業
大正14年頃



福岡県師範学校校門
昭和8年頃



福岡教育大学 150年の歴史

学科取調所設置

明治6年3月5日

福岡師範学校

明治9年7月26日

福岡県尋常師範学校

明治20年4月1日

福岡女子師範学校(女子部独立)

明治36年4月1日

福岡県福岡師範学校(改称)
福岡県小倉師範学校設置

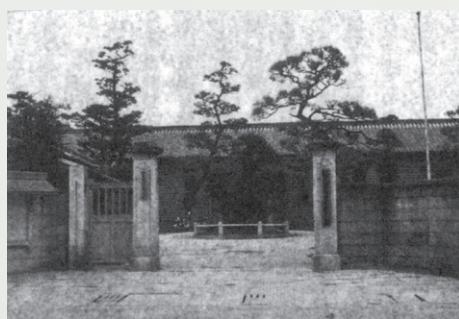
明治41年4月1日

福岡県立実業補習学校教員養成所設立

大正10年4月1日

福岡県立青年学校教員養成所

昭和10年4月1日



福岡師範学校



小倉師範学校



福岡女子師範学校



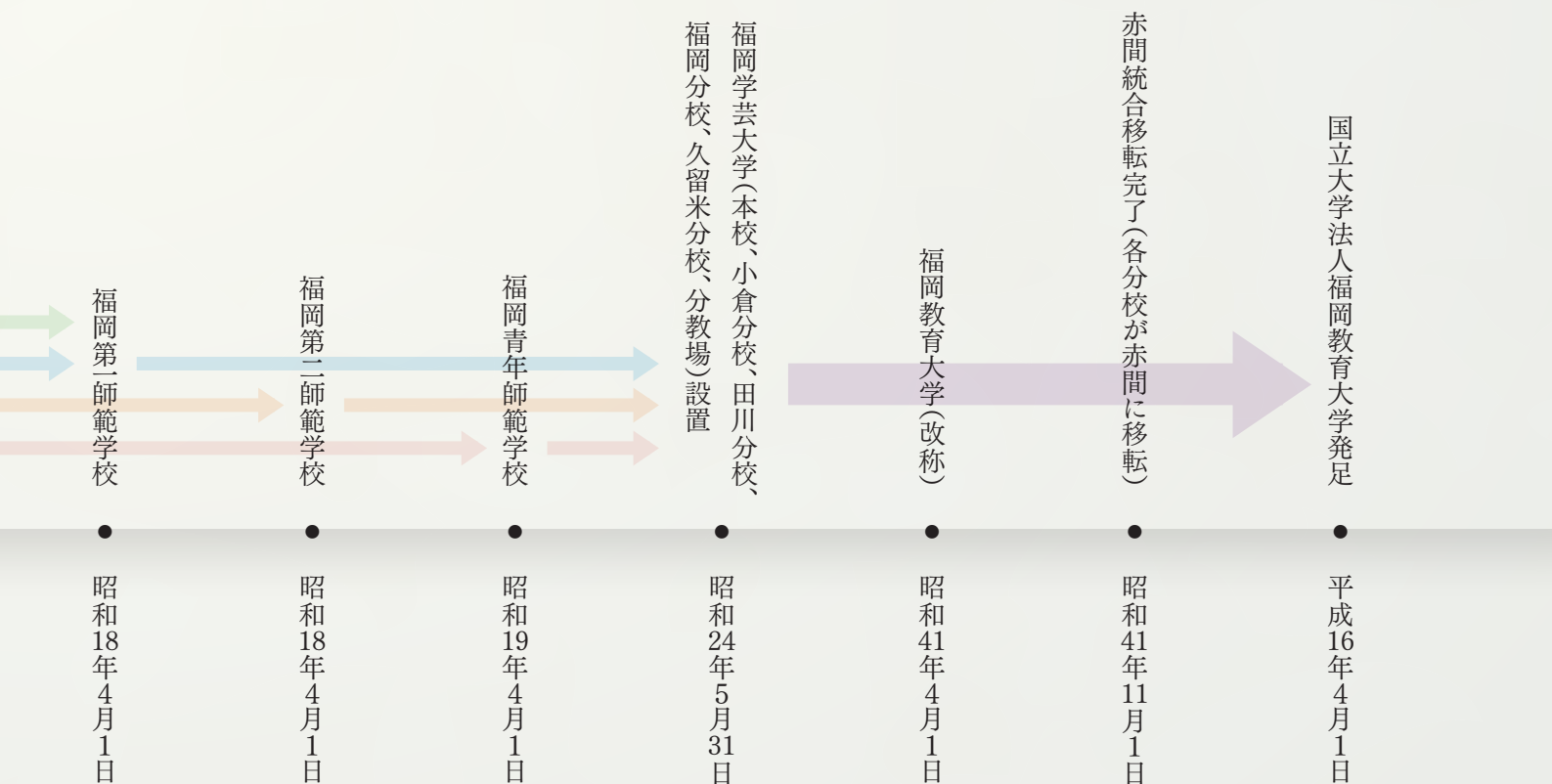
福岡県師範学校授業
昭和8年頃



福岡県師範学校授業
昭和8年頃



学生掲示板前



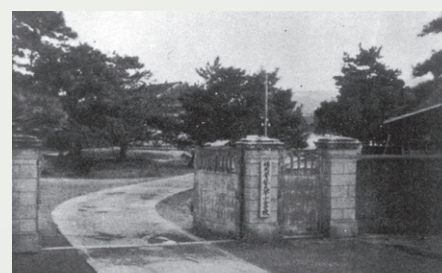
福岡学芸大学福岡分校



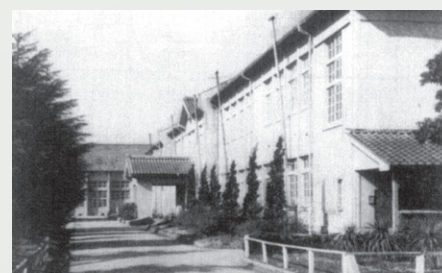
福岡学芸大学久留米分校



福岡学芸大学の本部および本校



福岡学芸大学小倉分校



福岡学芸大学田川分校

写真ギャラリー

■昭和24年



開学記念祭



開学記念祭

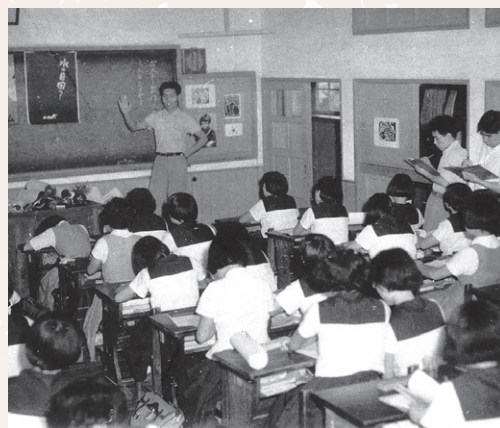
■昭和20年代後半



学生食堂



教育実習



教育実習

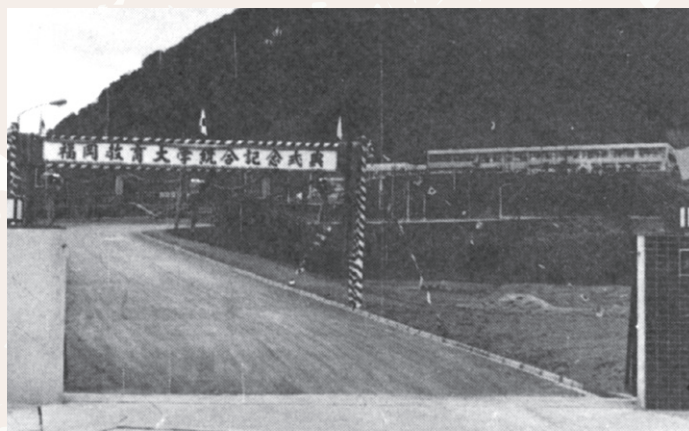


学大祭



授業風景

■昭和41年



統合記念式典



統合記念式典

■昭和40年代頃



学園風景 英語授業



学園風景 物理実験



学園風景 書道科(かな書道)



学園風景 保健体育(テニスコートにて)

福岡教育大学基金のご案内

福岡教育大学では、教育研究の更なる発展や充実を図ることを目的として、「福岡教育大学基金」を設けております。

特に「修学支援事業基金」では、経済的理由により修学に困難がある学生が、希望する教育を受けられるように、

皆様からいただいたご寄附を、学生のために特化して活用します。

寄附をされる際に、「修学支援事業基金」と事業を特定してください。

広く教育界、産業界、地域の皆様方に、本基金への格別のご理解とご支援を末永く賜りたく、お願いを申し上げます。

福岡教育大学は、明治6年に「学科取調所」として設置され、令和5年に創基150周年を迎えます。創基150周年を節目とし、教育研究の更なる発展や充実を図って参りたいと考えておりますので、更なる基金へのご協力をお願い申し上げます。

公式ホームページ

福岡教育大学基金

検索

インターネット(クレジットカード払い)による寄附金の受付を開始いたしました。

お問い合わせ先

福岡教育大学財務企画課

TEL:0940-35-1218

FAX:0940-35-1701

E-mail:kaihosa@fukuoka-edu.ac.jp

Joyama 通信 特別号

福岡教育大学広報誌特別号 2023年●月●日
編集発行: 国立大学法人 福岡教育大学 経営政策課

〒811-4192 宗像市赤間文教町1-1
TEL.0940-35-1205 FAX.0940-35-1259
e-mail: kouhou@fukuoka-edu.ac.jp
ホームページ: <https://www.fukuoka-edu.ac.jp/>



福岡教育大学
イメージキャラクター
フッキー



大学HP



Twitter



YouTube

リサイクル適性 (A)

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。